

生きてはたらく言語能力を高める国語科学習

～他教科、日常につながる喜びや可能性を感じられる指導の工夫・改善～

研究実践1 <書くこと>

第5学年 単元名 表現を工夫して、俳句を作ろう

教材名 「日常を十七音で」

授業者 高山市立花里小学校 庭瀬 志摩 教諭

研究内容1 見方・考え方を働かせた主体的・対話的で深い学びを実感できる指導の工夫

1 魅力ある単元構想の工夫

① 日常生活とのつながり、児童の思考や気づきを大切にしたい学習過程

- ・自分の生活の中で気づいたことや驚いたこと、心が動いたことを豊かに想起できるよう、単元の導入前から日記を使って材料集めを行った。
- ・表現技法の学習では、児童の気づきを大切にしたい愛着あるネーミングを行った。
例：もじもじ文字の技（表記方法）、音の技（擬音語・擬声語）、順序の技（語順入れ替え）等
- ・単元の終末には他学級の仲間からの投票や先生賞を設定し、創作への意欲をかき立てた。

単元構想を工夫することで、表現技法の種類や効果が子どもたちにとって身近なものとして認識された。また、自分の生活の中で心が動いたこと（＝伝えたい思い）を題材に、創作意欲を継続させて学習に取り組むことができた。

2 仲間と伝え合い、自分の考えを深めることができる発問や場の吟味・工夫

① 自ら追究方法を選択して考えを深める場の設定

本授業では、前時に仲間と見出した「表現の工夫の技」を取り入れ、自分の感動が伝わる俳句へと表現を高める活動を行った。本時に取り入れたい技の一つを選択した後、自らの願いに応じて方法を選んで追究できるよう、次のような場を設定した。

ア 表現の工夫をしながら、自分でじっくり考える。

イ いろいろな言葉や季語が載っている本や辞書が置いてあるコーナーで、よりぴったりの言葉を探す。

ウ 自分がアドバイスをもらいたい仲間や先生のところへ行き、交流する。

② 仲間と伝え合い考えを深めるための発問や場の工夫

決められたペアとの交流はできるが、自分の願いに応じて相手や場を求めて交流を行うことに消極的な児童も多いため、上記ウのように自由に交流する場を設定した。また、効果的に交流を進められるよう、次のような工夫を行った。

- ・ICTを活用し、学級の仲間が作った俳句を互いに見られるように設定した。
- ・児童との対話を通して教師が困り感をつかみ、同じ技を使っている仲間や同じ困り感を抱いている仲間等との交流を促す。
- ・季語や言葉の本、辞書が置いてあるコーナーで迷う児童同士をつなぎ、相談しながら解決できるよう誘導コーディネーターする。

言葉や季語が載っている本や辞書が置いてあるコーナーを充実させ、日常的に設置したことにより、自分の俳句をよりよいものにしようと粘り強く活動する児童の姿が見られた。また、教師が児童同士をつなぎファシリテーター的な役割を果たしたことで、自分の困り感を解決するための効果的な交流を行う姿が見られるようになった。

児童は表現の工夫を取り入れて熱心に自分の俳句を推敲していたが、ともすると「伝えたい思い」から意識が離れてしまう姿も見られた。思いと表現を一体化させた交流や評価について考える必要がある。